やはり俺の青春ラブコメはまちがって。前

恋と花火とテニスコート

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『やはり俺の青春ラブコメはまちがって。』の始まる前のお話。テニス部騒動を扱います。

三浦優美子ａｇｅ　由比ヶ浜結衣ｓａｇｅ　なのは原作の八幡と人間関係が変わっているからです。原作準拠視点で見たい方はお勧めしません。全６話の予定。

『やはり俺の青春ラブコメはまちがって。』はチラ裏におります。一緒に読んでもらえるとありがたいです。この先の話が林間学校からクリスマスまで続きます。

誕プレ話・スカラシップは……需要があればです。

目次

第0.1話　雨の日の教室は　1
第0.2話　昼休みの約束　10
第0.3話　ベストプレイスにて　17
第0.4話　テニスの王子？　25
第0.5話　THE練習　34
第0.6話　THE試合　43

第０．１話　雨の日の教室は

「八幡、ＭＡＸコーヒー党の集会を始めます」
「……単に昼休みＭＡＸコーヒー飲んでだべるだけですよね……」
「何か不満でもあるのかしら」▪
「いいえ。滅相もございません」

俺の隣に座る美人の先輩は、総武高校でもかなり有名な変人だ。名前は藤村ヤスミさんという。中学の先輩でもあるのだが、在学中には面識なかったな。俺は影の薄いボッチだし、この人は中学時代は今以上▪に有名人だった。

いろんな男と付き合ってはすぐ別れるとか、中学陸上の市の記録を持っているとか、あと、サッカー部でレギュラー。男子のいるサッカー部な。中学までは女子も参加できるんだよ公式戦まで。高校は所属はできるが出場できないので、普通は女子サッカーで別になるんだ。でも、この人は試合に出ないけど、普通に練習とか練習試合に出たりして▪いた。今年の４月に引退させられて、いまは……俺と同じ奉仕部の部員なんだよ。なので、１年の時より絡まれる時間が増えた気がする。

「天気いいわね。今日もこの場所はいい風が吹いてさわやかね」
「はあ、俺のベストプレイスだから当然ですね」
「そう、私たちの……に訂正しないさい」
「……承知しました」
「素直で非常によろしい」

何でもないことなのだがボッチの俺にとっては、こうしたささやかな共有だってすごく久しぶりで、小町以外とはほとんどないことだから、こう、勘違いしてしまいそうになる。

奉仕部に入れられた経緯はそのうち話すことがあるかもしれない。俺が奉仕部に入った途端、藤村さんはその噂を聞きつけ俺に接触してきたんだよ。

1年の最初、ケガをして一人1ヵ月遅れの新入生生活を始めた俺はすでに出来上がっている人間関係に割り込めるはずもなく、中学時代と同じくボッチな生活を繰り返すことになったんだよ。まあ、高校になって新しい学校生活で友達ができたり、部活に入ったりなんて希望に胸を膨らませ、早起きしてしまって登校した挙句、犬をかばって大怪我した俺は、やっぱ大バカ者なのかもしれない。▪

そんな俺にうっかり興味を持ってしまったこの美人さんは、それから何度も昼休みに俺のところに来るようになり、周囲の視線に耐えられなくなった俺は、テニスコートが見えるとある校舎の一角で昼を食べることになったわけだ。でも、昼休み校内徘徊を趣味とするこの変人にはすぐに見つけられ、たまにコーヒーを飲む仲になっていたんだよ。

教室でクラスメイトと必要最低限の業務的会話しかしない俺にとって、この人が唯一の学校内での話し相手でもあるんだ。だから、部活で一緒になるのは少々うれしくもある。ちなみに、春休みうちにいきなり訪れたこの変人は、小町と初対面にもかかわらず意気投合し、最近は週末家に遊びに来ることもあるので、なんか友達になったのかと勘違いしそうになるのだが、あくまでも俺は観察対象に過ぎない。

この人は、1年の時から俺と、雪ノ下雪乃、葉山隼人を観察対象としてるからな。葉山は部活の後輩としてかなり仲よくしていたようで、一時期は付き合っているのではと噂になったくらいだ。本人は否定しているけどね。

俺が奉仕部に「強制入部」させられたのをこれ幸いと、4月でサッカー部を引退させられた足で、奉仕部に入部しなおしたのだ。変だろこの人。

「だって、あんたと雪乃をまぢかでみられるのよ。それに、部活も変だもの。面白そうだわ」

――――　全然面白くありません。雪ノ下は怖いだけだよ八幡。

藤村さんの入部した後、クラスメイトの由比ヶ浜が偶然相談に来たんだよ。葉山と知り合いのこの人は、由比ヶ浜も知り合いでさ、なんだかんだで、由比ヶ浜も奉仕部に加わることになるようなんだ。でも、葉山のグループってわりと放課後も一緒だろ。部活入って大丈夫なのかって思っていたんだ。

雨の日の昼休みは教室でじっと息を殺している俺、まじアッサーション。というわけでもなく、非常に居心地が悪い。朝コンビニで購入しておいたパンを食べつつ、マッカンでもこの後、買いに行こうかどうか考えていたりする。

とは言うものの、藤村さんが雨の日は教室探索をいつも以上に熱心にするため、この場にいなければならないということもある。あの人は、昼休み面白い奴がいないかとか、面白いことがないか校舎内を巡回することを趣味としており、雨の場合昼休み教室内の密度が高まるため、いつもに増して熱心に観察しているのである。

そのため、自分の席から離れていたりすると、あとからやってきた藤村さんがクラスの奴等に「八幡知らない？」と聞きただしたりするケースが発生する。まず……俺の名前を知っている奴がいない。教室で俺は「ヒキタニ君」と呼ばれており「比企谷」でも「八幡」でもないのだ。

さらに、由比ヶ浜は独自認定の「ヒッキー」なる呼び名を勝手につけており、どこかの国のシマの名前のように勝手に名付けて領有権を主張するつもりのようである。だが、その名前は歴史的に別の人の名前である……宇多田ヒカルさんとかではないでしょうか。あと、全国数十万の引きこもりの皆様のための呼称であると思います。▪

なので、あの人が「八幡」といっても、鶴岡でも岩清水でも太郎義家でもない俺のことだとクラスの人間はわからず、「あんた八幡知らないなんて死刑よ死刑‼」などと物騒なことを言い始めるので、大変困っている。

さらに、うちのクラスを仕切っているだけではなく、学校全体でも

最上位カーストに所属する葉山隼人なるイケメンが２Ｆには存在するのだが、そいつは藤村ヤスミさんの舎弟なので、立場的に、そいつと俺は舎弟仲間と彼女の中では認識されている。

――――　大変困ります。アウトカーストと同列にリア充の王様を認定しないでくだしあ。

葉山は俺のことを「比企谷八幡」と認識している数少ないクラスの人間だが、やはり上位カーストの人間が底辺の俺を友達みたいに呼ぶのはクラス内の秩序のかく乱要因となるので、接触をすることをお互い避けている関係だ。葉山は、藤村さんとは何かあるのかもな。彼女に絡まれている時、時折冷たい視線を感じることがある。俺じゃなくて、相手にその視線を送れよ。

ちなみに、ボッチの俺は「オタク」の方たちとも交流することができない。例えば、クラス前方に存在する小田とか田原とかがモンハンあたりを楽しくプレイしているのに……参加したいのだが、……あいつら俺が学校一の有名な美人さんに絡まれているのを観察しているので、たまに話しかけようとすると、凄い警戒心を発されてしまうのだ。

中学時代もそうだが、自分で言うのもなんではあるが悲しいことに中途半端にイケメン風な俺は……イヤイヤこ、小町と藤村さんはそこそこ良いって言ってくれるし、自称じゃねえし‼　とにかく、いかにもオタの奴等からは相手にされないんだ。

それに、オタ＝コミュ障ではないからな。ボッチはかなりの確率でコミュ障なのだ。だから、思考していることを相手に伝えることが大変苦手ゆえ、リア充にもオタにも接することができない、正に、出家したかのごとき尊い存在なんだよ。嘘です、ごめんなさい。

つまりだ、雨の日の昼休み、暮らしの自分の席で一人じっとしているボッチがいたとすると、そいつは心の中で千日回峰行　を行う阿闍梨の如き存在なんだよ。だから、立ち上がる時も独鈷所と声をかけたりするんだ。

そんな、外は篠突く雨の降る中、葉山率いるリア充軍団はテンション高く、教室後方窓際の席辺りにたむろし、楽しげにお話をしているのだよ。そこには、由比ヶ浜も女王様の侍女よろしく侍っているわけだ。

「あーし、帰りにアイス食べたい」

みたいなことを金髪美人の女王様がおっしゃっております。こいつは葉山グループ（以下ＨＧと略）の葉山隼人の相方で三浦優美子しゃん、王様と女王様▪なんだよ。確かに顔立ちは整っているし、はっきり、いや、かなりきつい言い方をするギャルメイクばっちりの女だ。雨の日は大変だろ。

制服はかなり着崩していて、うっかり見てしまうと、「何見てんだよ」くらいの勢いで睨まれるので要注意だよ。

――――　見られるために着崩してんじゃねーのかよ、おい。

「今日は部活あるから、無理だよ」

Ｈａｈａｈａって感じで、爽やかに誘いを断る葉山。確かに、こいつは文武両道で性格も……いい性格をしている。悪い奴ではないが、そりゃ、どうかなと俺は考えている。なにやら３１でアイスが安い日らしく、チョコとショコラのダブルが食べたいそうです。

「ショコラ」とは、フランス語で　〝ｃｈｏｃｏｌａｔ〟　と書き、英語の　〝ｃｈｏｃｏｌａｔｅ〟　とほぼ同義語なのだが、板チョコやチョコチップなどの加工する前の工業品を「チョコレート」、パティシエにより加工されたトリュフなどの菓子やデザートを指して「ショコラ」と呼び分けることもあるので、加工度の差異なのであろうか。

とは言うものの、ゆで卵とスクランブルエッグの違いみたいなもんでチョコには違いなんだろ。どうでもいいけどさ。

「あんまり食べると後悔するぞ優美子」

女子を名前呼びするなんて、妹以外不可だ。ちなみに、藤村さんは「親父と彼氏以外の男には名前を呼ばせない」という公式見解があり、葉山の相棒の▪Ｂ・戸部は「ヤスミ先輩」呼びして怒鳴られることが

よくある。うん、うるさいから黙らせてやってください。
「あーし、いくら食べても太んないし」
なんてあと2年くらいだよ‼　と内心思いながらも、由比ヶ浜の「だよねー」みたいなお追従を聴きながら、「リア充の相手するキョロ充って大変だな」と思うのだ。え、オリヒロ上げの原作ヒロ下げじゃねえよ。1巻にちゃんと「きょろきょろしている」って書いてあるだろ。そのままだよ。
リア充の会話は、何処かＴＶのバラエティー番組のような構成で、メインのキャストが話題をふって、ひな壇がなんか面白いことを言ってスタジオ大爆笑みたいな淡々とした作業を繰り返しているだけな気がするのだが……それって楽しいのかと思う。楽しいんだよな。ＴＶ離れと言われて久しいが、リア充は未だにテレビっ子なのだろうか。スマホ片手にＴＶ見てんだろうな。
「あーあるある、優美子スタイルいいし～　でもあたし今日用事あるから～」
由比ヶ浜結衣さん。話合わせてさり気に自己主張するの良くないですよ。
「今日も喰いまくるっきゃないでしょ」
男漁るんですかそうですか。てか、やっぱ由比ヶ浜の話なんて聞いてねえな。リア充って、自分より下の人間の話聞かねえよな。俺の唯一の校内の知り合いであるあの人は「ファッション・ボッチ」なので、俺の話をちゃんと聞いて、「馬鹿じゃないの」とか「あんた、何考えてんの」とか指摘して……して……まあ、ほら、意見してくれんだよ。小町と同じ感じだしな。
藤村さんはカースト最上位の上のボッチなので、「ボッチの女王」と俺は心の中で呼んでいる。
「やー　優美子マジ神スタイルだよね～脚とか超きれー　でもあたしきょうは～」
由比ヶ浜結衣さん、あなた、自分から奉仕部に参加するって言いだしたのに、グループの皆さんへの告知をしていないのではないのかし

ら。だよね。さっきから「きょうはきょうは」ってるけどさ、奉仕部は学校ある日はあそこで待機がデフォだから、放課後別行動しないとだろ。いつ話すんだお前。
「えーでも雪ノ下さんとか言う娘のほうがヤバくない」
「あーたしかにゆきのんは……」
「……」
　由比ヶ浜、お前が今一番ヤバい。三浦は眉の付け根をひくつかせ、由比ヶ浜はしまったとばかりにフォローをするのだが……こうかありません。見かねた葉山が「部活の後つき合うよ」と助けてくれなければ、多分大変なことになっただろう。
　そして、由比ヶ浜は深呼吸をして何かを話し始める。どうやら、雪ノ下と昼めし食う約束しているので、今日は昼休み出かけるって言いたかったみたいで……もういい加減時間たってるだろ。あーまずいわ。これは。
「八幡、面白いこと始まってるわね。もしかして、雪乃も来るのではないのかしら」
　はい、ご明察です。雪ノ下は放課後もすごい速さで部室に移動しています。恐らく、朝鍵を受け取り、昼休みは自習室代わりに部室を使い、放課後も直行しているんだろうね。ところが、昼休みに一緒にご飯を食べる約束をした由比ヶ浜がうだうだやっているので、しびれを切らして突撃してくるでしょう。
「俺は逃げ……『あんたも見届けるのよ』……かしこまりました……」
　由比ヶ浜はハッキリと昼休み抜ける理由を言わないので、話が全然進まず、三浦がイラつき始める。小学校で習うだろ、理由をきちんと説明して断れってさ。約束があるからってハッキリ言えばいいし、雪ノ下にも三浦にも迷惑かけてんじゃんお前。空気読まず、いや流されずに気を使えよなと俺は思う。
「それじゃわかんないから、言いたいことあんならハッキリ言いなよ。あーしら友達ジャン。そういうさーかくしごと？　よくなくない？」
　三浦の話し方はきついし、自分が上の立場っていう目線で言うのは確かに感じが悪いかもしれない。だけど、こいつの言っていることは

すべて正しい。由比ヶ浜は、奉仕部に入ったことも、雪ノ下と昼めしを食べる約束をしていることも、怒られたくないから黙って誤魔化そうとしている。そのことについて、三浦は友達甲斐がないと言っているわけだ。それも、かなり抑えたトーンでだ。仲良いと思っている友達に、内緒で色々されて誤魔化されるのは、彼女にとって心外だろう。

そりゃ、俺みたいな赤の他人のモブ以下の存在には三浦は怖いだけだが、グループの人間を大事にするところは伊達にトップカーストを張るだけのことはあると俺は観察している。

――――グループの秩序を乱す由比ヶ浜を見逃すのはリーダーではない。

そういうことなんだろ。横にいる変人ならそう答えるはずだ。

「ごめん」

理由も説明せず、ただ謝罪の言葉を述べる由比ヶ浜。あーまずいぞ、三浦は謝ってほしいんじゃない、説明してほしいんだ。さっきから何度も繰り返し三浦は言っているだろ。何聞いてんだお前。

「だーかーら、ゴメンじゃなくて、いいたいことあるんでしょ」

俺は三浦に感心する。由比ヶ浜のとこ本当に友達だと思っていなければここまでしつこく聞けない。由比ヶ浜は余計なことはペラペラしゃべるが、肝心なことはきちんと言えない。藤村さんが口にする『正しい資質』が決定的に欠けているんだと。

ちなみに俺はあるんだってさ。犬助けた話聞かれたときに言われた。

『為すべきことを成すべき時に迷わず実行する判断力と実行力』

そんなカッコいいもんないと思うけどな。でも、もし、この人がそう認めてくれるのなら、そうありたいと思う。小町も喜ぶしな。

「あんさー　ユイのために言うんだけど、そういうはっきりしない態度、結構イラっと来るんだよね」

そう、人は誤魔化そうとしてるなと感じるとさ、親しい人間なら悲しい気持ちになるだろ。話すより話さない方が相手を傷つけるんだよ。由比ヶ浜の優柔不断さは人を傷つける。

「……ごめん」

「またそれ？」
三浦が怒りと呆れを交えて高圧的に笑う。ああ、これだけ同じことを繰り返すのであれば、怒鳴り散らされておおかしくない。でも、友達だからこんなもんで済んでるんだよな。
正解は、約束があることを説明し、席を離れる……だよな。由比ヶ浜は追い詰められて一層キョロキョロしている。そして……
「謝る相手が違うわよ由比ヶ浜さん」
やはり現れたか雪ノ下雪乃。そして、我が主がすごい笑顔でそれを見ている。はあ、もうＭＡＸタイム自分行っていいでしょうか。

第０．２話　昼休みの約束

Ｊ組以外で見かけることのない雪ノ下雪乃が教室に現れた時点でかなりの事件なのだが、さらに、由比ヶ浜に話しかけている時点でもかなーりの事件なのだ。

入口に立つ雪ノ下雪乃の姿に、視線が集中する。三浦の威圧的な声とは異なる……冷酷な響きを持つ声音。物音ひとつ立てる者はいない。正に、静寂。あの騒がしい喧噪に満ちた教室がだ。

「由比ヶ浜さん。あなた、自分から誘っておきながら待ち合わせ場所に来ないのは人としてどうかと思うのだけれど。遅れるなら電話の一本くらい入れるのが筋ではないかしら。」

うん、頭回らなかったんだよ。由比ヶ浜は雪ノ下の電話番号を知らないらいしい。俺も知らんけど。一概には責められないわねってことだと。

「あーしたちまだ話が終わってないんだけど」

そう、大事な話なんだよ。由比ヶ浜は二重契約をしているわけだ。今まで昼休みは一緒にお昼を食べるグループであったわけだろ。それが、自分の約束を反故にして、知らぬ間に雪ノ下と昼飯を食べる約束をしている由比ヶ浜がいる。

この中で、最も不誠実なのは由比ヶ浜であり、雪ノ下は善意の第三者で責任はなく、なんの予告もなしに約束を反故にされた三浦には由比ヶ浜に対して損害賠償を請求できる立場だろ。

――――　どう考えても全面的に由比ヶ浜結衣が悪い。

三浦も雪ノ下も筋を通している。そして、その場の思い付きで約束を二重にして平然と誤魔化そうとして失敗した不誠実な人間がいる。

「八幡。面白いことになったでしょ」

「まあ、攪乱要因ですね。部活動、気を引き締めないと、あいつに足ひっぱられかねませんね」▪

「正解。でも、そういうことも含めて対応するから面白いのよ」

そんなの嫌だ。

雪ノ下はピシャリと三浦に言い返す。「なにかしら、まだ昼食を

とっていないんだけど」だと。そりゃ三浦も一緒だ。由比ヶ浜がはっきり言わないからな。
「はあ、何言ってるの？　あーしがユイと話してんだけど」
雪ノ下は、三浦を揶揄するような挑発的な言い方をする。ああ、三浦は可哀想だ。由比ヶ浜の不誠実さに何度も理由を問い質していただけなのに、雪ノ下に猿山の大将呼ばわりされてだな。まあ、こいつから見れば、自分以外とるに足らない人間だから、頭の中で思っていることがそのまま口をついてでてくるってこった。めんどくせえ女だ。
これで奉仕部の部長様とは、鼻で笑わせるぜ。
「お山の大将気取りで虚勢をはるのは結構だけど、自分の縄張りだけにしなさい。あなたの今のメイク同様、すぐにはがれるわよ」
雪ノ下はこんなこと言ってるけどな。お前も大して変わんねえよ。ああ、なんでこんな女どもと関わらなきゃなんねえんだよ。
教室の空気はいたたまれなさＭＡＸだ。俺の大好きなＭＡＸとえらい違い。苦みとえぐみの集合体だ、甘さが足らねえ。
葉山は空気作れなくなってるし、三浦はあまりの物言いに茫然としている。そして、言いたい放題言った雪ノ下は教室を出ていく。由比ヶ浜はスカートをつかんで、何かを話そうともがいているようだ。
「優美子ちゃん可愛いそうね。あの子、持ってる子なの、あんたと同じでね。だから、結衣ちゃんみたいな子でも友達だと思ったらどんな形でも守ろうとしてしまうのよ。だから、こんな日もあるの」
三浦の『正しい資質』は……▪
『自分の仲間を大切にし、守ろうとする強さと優しさ』
だから、理由の如何を問わず、仲間のためには周りを敵に回すことも厭わないのだそうだ。ただし、守る能力に限界があるので、こういうこともよくあるらしい。
「隼人辺りがしっかりしていれば、こんなことにならずに済むのだけど、あいつは相変わらずこういう時に逃げるのよ。持ってないからね」
はあ、俺もあの二人の間に入る勇気はありません。無理です、怖い

もん。
教室にはすでに、三浦と由比ヶ浜と俺と藤村さんしかいない。俺はいたくているわけじゃねえんだよ。
由比ヶ浜がぽつぽつと話を始める。
「人に合わせないと不安で……空気読んで……イライラさせちゃう……あったかも」
カモじゃねえよ。めいっぱいだろ今日も。で、一番大事なことは読めねえ。
「むかしからそなんだよね……団地育ちだから……人が周りにいるのが当たり前で……」▪
いやいや、団地関係ないだろ。ちゃんと自己主張する人の方が多いわ。団地の住民の皆さんに謝れ。てか、環境のせいにすんな。三浦が「何言いたいのか全然わかんないんだけど」という。ごもっともです。
由比ヶ浜は言葉を続ける、俺や雪ノ下が言いたいこと言っているのが楽しそうで、合わせてないのにあっていて……って合ってませんから何一つ。あいつがいちゃもんつけてくるのに、俺がウイットに富んだユーモアで小気味よく言い返しているだけだろ……すんません、嘘つきました。
というか、三浦は相当我慢して頑張ってたぞこの話。約束があるって、優美子とお昼食べなくしちゃってごめんねって謝るべきだろ。
「それ見てたら、いままで必死にあわせようとしてきたことがまちがってたみたいで……」
じぇんじぇんまちがっている。確かに雪ノ下はこう言った。
『その周囲に合わせようとやめてくれるしら。ひどく不愉快だわ。自分の不器用さ無様さ、愚かしさの遠因を他人に求めるなんて恥ずかしくないの？』
そう、由比ヶ浜は何も考えていない。ただ相手の顔色を窺って反応しているだけで、雪ノ下の気持ちも、三浦の気持ちも考えていない。そして、雪ノ下のこの言葉の意味も理解していない。形だけ合わせるのでなく、心から合わせるべきなんだよ。だから、不快なんだ。人間の形をした別の何かなんだよ。

三浦は、由比ヶ浜とお昼を食べるの楽しみにしていたはずなんだよ。みんなで今日もワイワイご飯を食べて、放課後の予定の話をして、なんなら週末の計画まで立てちゃおうかとか考えてたかもしれねえだろ。

ところが、由比ヶ浜は雪ノ下と勝手に約束して、そのことも黙って誤魔化そうとして。普通はだ、先に約束した三浦に断りをいててから雪ノ下と約束しねえか。どう▪考えても、由比ヶ浜が三浦を一方的に斬り捨ててるよなこの話。

そりゃ、言い出せないよな。失礼極まりないもんな。でもさ、こいつがおどおどキョロキョロしているせいで、まるで三浦が悪いかのような印象を与えてるんだよ。▪

どうおもう？

「八幡、あんたの言う通りヨ。だから、あとはあたしに任せなさい」

由比ヶ浜は、「だから、無理しないであたしもてきとーに生きようかなって……」ふざけんな！　雪ノ下の考えも三浦の思いも何一つ理解できてないだろ。▪

「別に優美子のこと嫌いなわけじゃないから、これからも仲よくできるかな」

俺は絶対無理。こんな、人の気持ちの分からない自分勝手なことをする女は無理です。ついでに、馬鹿は大嫌いです。

「まあ、いいんじゃない」

三浦滅茶優しい。馬鹿な子ほどかわいいのか。由比ヶ浜は何か達成したくらいの勢いで教室を出ていった。二度と帰ってこないで欲しいくらいだ。

藤村さんが三浦に歩み寄る。

「優美子ちゃん、偉かったわ。あなたは何も悪くないのに、結衣ちゃんが足らないことを責めず、何度も理由を聞いていたわね」

そう、友達が約束をたがえる理由をただ聞いただけなんだよ。なんで、悪者扱いされなきゃなんねーんだよ。あと、張りぼてリア王はどうなんだよ。

「結衣ちゃんはあんな子だから、仕方がないわ。話して理解できる子

ではないのよ。だから、優美子ちゃんが引いてあげて頂戴」
「は、はいぃ……ぅぅぅ……」
三浦は藤村さんの胸に頭を預けて泣き始めてしまった。そりゃそうだ。よく泣かずに頑張ったと思う。
藤村さんは言葉を重ねる。あんたが結衣ちゃんを見捨てなければ、あの子はきっとあんたの気持ちが理解できる日が来ると思う。でも、今は自分の中で何かが変わり始めたばっかりだからわからないだけだって。だから、あんたは自分と仲間を信じて待ってあげなさいって言葉をつづけた。
この学校で三浦にきちんと話をして支えられるのは、この人くらいだろうな。

三浦はひとしきり泣くと「トイレに行ってきます。ヤスミ先輩ありがとうございました!!」と頭を下げると去っていった。メイクも崩れたしな。
「で、隼人。あんた相変わらずね」
「……すみません」
「どう考えても結衣ちゃんが約束勝手にたがえたのが悪いし、理由も雪乃が出てきた時点で分かったんじゃないの」
「はい……」
「優美子ちゃん悪者にして、雪乃に言いたい放題言わせて、結衣ちゃんは相変わらずバカのまんまだし、あんたのグループどうなってるのかしら」
はい、その通りです。もっと叱ってやってください。でも、観察優先したあなたも同罪ですよ。

「八幡、ＭＡＸ飲みに行くわよ」
「……時間ないですよね」
「５時間目遅刻していきなさい。おなかが痛くてトイレに行ってたと

か言えば大丈夫ヨ」
　まあ、そうだな。心に甘さが必要な気なするしな。俺たちはベストプレイスが無理なので、屋上の出る手前の踊り場でブレイクすることにした。由比ヶ浜と雪ノ下の話だよなどうせ。
　俺と藤村さんは並んでＭＡＸタイムをしている。
「あんた今日のあれ見てどう思った」
「雪ノ下はあの性格だから仕方がないですよね。切り取って見たのだから三浦が一方的に由比ヶ浜を攻めているように見えたでしょう」
「そうね。その前から見ているあたしたちからすれば、責められて当然。結衣ちゃんはね、ああいう子なの」
　どうやら、1年の時は２Ｆの相模南のグループにいたらしい。ギャル化したのも相模のコーチの成果なんだと。でも2年になって三浦にスカウトされたら、あっという間にグループ脱退してＨＧに加入。こんどは、奉仕部で雪ノ下ともつるみ始めたんだ。
「まあ、自分の足らなさを武器にするっていう感じなのよね」
　しっかりしたリーダー然としている上位カーストの女子からすると、由比ヶ浜の頼りなさげなところが、可愛らしい外見と伴って魅力的に見えるのだそうだ。
「性格的に自分と正反対に見えるのがポイントね。でも、実際は……」
　藤村さんいわく『寄生』に近い存在なんじゃないかっていう。宿主を変えて女子グループの中を行き来する存在。そして、単独では役立たず。クッキーづくりの時もひどかったもんな。卵一つまともに割れないしな。▪
「だから、あんたも注意しなさい。八幡の正しい資質をうまく利用されかねないのだから」
　はあ、そういうことか。俺なら頼まれたらいやと言えないって思われているってことですよね。確かに、クラスメートで部活仲間で可愛い女の子に頼まれ▪たら、断れる自信がないな。
　今日の三浦を見て思う、あいつは、その瞬間瞬間で自分の都合の良い環境を作ることがすごく上手だ。だから、何かあった時、俺を身代わりにして自分だけ助かろうとする可能性がある。そういう意味だ

よな。

てな感じで、今日も藤村さんの人間観察に付き合わされたわけだが、リア充グループというものに対する認識を俺は少々改めなければならないと思っている。

確かに、三浦優美子はその容姿、性格、行動、からして大変偉そうだし、その他大勢からすると、煙たい存在である。でも、ただ外見が優れていて押し出しの良い性格だからトップカーストになれるわけではないってことなんだ。雪ノ下や藤村さんのようなトップカースト級のボッチならともかく、葉山のように文武両道のアイドル的存在でなければ、人柄というか、面倒見の良さのようなものがなければ、人の上には立てないってことなんだな。

それに、友達のためには自分が悪者になることや泥を被ることも厭わないってところもあるのだろう。正直俺は、三浦優美子を見直したし、誤解していたのだと思う。

反面、由比ヶ浜結衣は曲者だ。最大の問題点は、自分の問題を認識できていないことだな。トラブルメーカーだろうあいつは。これからも奉仕部で余計なことをしてくれなければ良いのだが、それだけが心配・なんだな。

ああ、こうして奉仕部は由比ヶ浜結衣が加わることで、俺と雪ノ下という藤村さんの観察対象がどう動くのか面白くなってきたと思われているんだろうな。うん、ふざけんなと言いたい。

第０．３話　ベストプレイスにて

どんなに可愛らしく、どんなに美しくとも妹は妹。滑らかな白い肌に白いスポブラとその下……かわいく思えても『俺に似ているからかな』なんて思ってしまうのは、リアルな妹だからだろうか。

朝から頭の悪そうな「ヘボンティーン」なる偏差値Ｕ２５クラスのファッション誌を▪読みながら、顔にジャムをつけて読みふける妹。まあ、ここまではいつもの光景▪だ。

「やっぱ今年はこれが来ちゃうのね小町ちゃん」

「小町も可愛いと思います。でも、ヤスミさん的にはお姉さんぽい感じの雰囲気の方が似合う気がします」▪

「ええ、そんなにあたし年取ったのかな」

「そう言う意味じゃなくて、ＪＫとＪＣだと同じ感じにならないし、ならないのがむしろ普通じゃないですか」

「あーでも、ＪＣとＪＫは近いけどさ、あたしの行きたい大学でこのカッコは▪確実に浮くから。だからさ、今年が着収めって思ってティーンズファッションを堪能しようと思うのよ」

「そう言うことですか。なら、小町もお供させていただきます」

「そう‼　今年は姉妹風にコーデしましょう。受験生同士だし、士気をあげる必要があるわよね」

何の話してんだ朝っぱらから。えーと、我が主であるところの藤村ヤスミさんです。この人はうちの前が通学経路なので、朝寄り道することがあります。小町とはＬＩＮＥで連絡とって、受験の相談とかも乗るみたいだな。兄妹揃ってこの人の舎弟みたいなもんだ。

「八幡、あんたも食べるでしょ」

「あー　コーヒーだけで。小町、もう時間ないぞ」

下着姿で家の中をさまよう姿は……いいのかこんなんでと思わないわけではない。残念な妹である。

「じゃあね、あんた小町ちゃん送っていくのよね、また昼休みに‼」

そう、しばらく前に小町が大寝坊してチャリで中学まで送って以来、朝、俺は小町を中学まで荷台に乗せて送り届ける業務が付加され

ているのだ。朝は妹、昼は藤村さん、夜は下手すると二人にわいわい言われる毎日で、俺の平穏な生活がむしばまれつつある。そして、奉仕部がその勢いを加速させているのである。

最近思うのだが、俺の周りの女性ってみんな個性強すぎないか。ほら、奉仕部の二人に、平塚先生、小町に藤村さん。まあ、６人で全力なんだけど。もう少しさ、普通がいいと思うんだよね。

小町は下の子特有の要領の良さもあって、俺の扱いが絶妙なんだよ。八幡マスターって感じだな。カプセルに入れられているまである。おかげで、俺の女性に対する警戒感は加速していてだな、女性を見ると男を利用する存在だと認定しているまである。

まあ、藤村さんは美人だが、利用する気がさらさらないので、そういう意味では小町との中和剤的存在なのかもしれない。だがしかし、俺の知らないところで俺は利用されているのかもしれない、あのボッチの女王様にだ。

「小町、お前があんまり俺を利用するとだな、女性不振になるだろ。結婚出来なかったらどうする気だ」

「……そんなの、ヤスミさんが回収してくれるに決まってるじゃん。わかってないのお兄ちゃんだけだよ」

え、そうなの。てっきり小町が養ってくれるとか、独居老人用の集合住宅みたいなところにぶち込んでくれるのかと思っていたんだが。いやいや、今の高校生活でもあの人との相手がしんどいのに、朝から晩まで家族みたいに一緒にいたらだ、俺の胃どころか、体中に穴が開くんじゃないかと思う。とくに、一部の熱心なファンどもの手によって。

藤村ヤスミは校内一の変人ではあるのだが、美人で性格も良くて後輩や・仲間の面倒見も良いので、熱心なファンも多いのだ。ちなみに、２Ｆのリア王葉山とその下僕の戸部もその一人だ。運動部系と一部の文科系の部活にはその手の人が多いと聞いている。

そんな人が俺に絡んでくるものだから、気配の薄い俺が目立ってし

まうと……大変居心地が悪いんだよ最近。
「お兄ちゃん、そろそろレッツゴーだよ‼」
自転車の荷台にまたがり、明らかに兄に対する道交法違反を強要する妹。これ、やっぱ犯罪教唆になるのかね。平たいところ選んで走らないと、「傷ものにされた」とか大騒ぎする我が妹のせいで、俺は近所においても居心地が悪く、居場所がないまである。
――――　故に、週末は家から一歩も出ない俺まじ聖人。
「事故には注意してね。小町乗ってるんだから」
「……ＯＫ。受け身とれよしっかりな」
「この人倒す気満々だ」
お前だけを行かせるわけにはいかない、倒れる時はチャリンコも一緒だ‼▪　俺は捨て逃げするがな。
確かに俺は入学初日に、自転車で交通事故にあったが、自転車に乗っていて不注意ではねられたわけじゃねえぞ。車道に飛び出した犬を助けて自分が轢かれたってだけでさ。まあ、命があってよかったって話だよ。
高校の近所でな、散歩させていた女の子の手からリードが外れてって話らしい。助けて轢かれて病院の３週間入院して、学校は１カ月休んでＧＷ明けから登校したら、この前の話通りだったってこった。
「そいやさー」
「それそれ」
「そいやさー」
「それそれ」
「……話が進まないんだけど」
「前略道の上からじゃねえの？」
「お兄ちゃん何言ってんのかよくわからないことあるよね。事故の後遺症？」
え、一世風靡セピアじゃねえの。いま柳葉さんは秋田で子育てしながら地元中心に活動してんだよ。
「事故の時の、ワンちゃんの飼い主さん、うちにお礼に来たんだよ」
「……聞いてないけど」

「……い、いってないからね。その時のお菓子がおいしくてさ」
お菓子独り占めにしたので、その話を封印していたらしいが、その封印を忘れて話し始めたらしい。これで、総武高校に進学したいとか……ナメンナ‼
「その人名前なんて言うの」
「お菓子の人？」
「おかしな人はお前だ小町。兄貴のケガの見舞いは独り占めにするわ、お礼を言いに来た人の名前は覚えていないは、内緒にしてたの忘れて話始めるわ。何なんだよお前」
入院した時も、3日に1度家族でチラ見したあと、外食三昧だったらしい。仕事切りあげたりするいい口実だな、息子の入院。その外食代はどの財布から出たのかも大変疑問である。
「……あ、学校ついたね。ありがとうお兄ちゃん‼」
これ幸いと小町はすたこらさっさを決め込んだのだが、かごにカバンを忘れる誠に残念な妹である。

「なんて感じだったんです」
「そう、小町ちゃんらしいわね。ふふ、相変わらずあんた達仲良しね」
昼休みのベストプレイス。今日も我が主である藤村さんと時間を過ごしているわけだ。
「今月体育で選択テニスなんですけど、葉山たちと一緒なんです。あいつら、我が物顔でテニスコート使うんで、失敗しました」
「でも、サッカーは嫌なんでしょ。サッカーなら、あたしが鍛えてあげられたのに残念だわ」
――体育のサッカー如きで鍛えられてはたまりません。
「女子の場合、サッカーあるんですか？」
「バレボールとかバスケじゃなかったかな。あたしはテニス以外は得意だから気にしたことないわ」
「へえ、あなたにも苦手なものがあるんですね」
この、完璧美人の変人さんにも苦手があるのかとちょっと嬉しくな

る。▪

「苦手ではないわね。要は、テニスにならなくなるわけ」

その昔、サーブ＆ボレーというスタイルがはやったようだが、現代の主流は高速サーブに頼らず、あらゆるショットを駆使する形に変わっているそうだ。

テニスの技術はラケットの進化とともにある。ゴルフや卓球などと同様、道具も日進月歩の改良を遂げてきた。中でもラケットのフレームの技術革新は「面の安定性」を促した。２００キロ超の高速サーブに対して、衝撃を吸収することで、狙った通りの正確なリターンが打てるようになった。

――――　盾と矛の盾が優位に立つ時代ということだろう。

車のタイヤの性能が改善されて、耐久性と粘りの両立が可能になったりするのと同じなのかもしれないな。

驚異的なスピードのサーブを売り物にする選手は次々と登場したが、「ビッグサーバー」の時代はラケットとリターン技術の向上によって、少しずつ陰りを迎えた。▪流行は弱点のないオールラウンドプレーヤーである。ときにサーブアンドボレーを披露することはあっても、多彩な引き出しでポイントを重ねていく。「勝利の方程式」は決して一つではなく、相手のタイプやゲームの状況に応じてタクティクスを臨機応変に変えていく戦い方にシフトした。あくまで世界の頂点はだ。

「あたしの場合、サーブが男性並みなのね。だから、サーブだけで終わるの」

なんですと。プロの頂点に立つ女性であっても、男性の最低ランクのプロに勝てないレベルだそうなのです。明らかに体力差が反映される世界。この人は、サーブだけで女子なら勝ててしまうので……

『テニスは得意でない』ということなのだそうだ。

「試合が長くて体に負担がかかるのもいやね。ストップ＆ゴーと体をかなり捻らなきゃでしょ。そこまで体に負荷かけて楽しいスポーツではないのあたしにとってはね」

藤村さんのサーブは打点が高く体重の乗った重たいサーブなのだそうで、この高校の男子テニスも練習相手として依頼されるほどの威力なのだと。
「バレーボールのピンチサーバーみたいなもんね。サーブだけなの」
まあ、それで勝てるならそれに越したことはないな。
俺たちの目の前では、女テニの子がポンポンと一定のリズムで壁打ちをしている。昼休みも自主練とは恐れ入るな。
ほぼほぼ目の前が海の総武高校は、臨海部ゆえに海方向と陸方向で風向きがよく変化するのだ。常に風が流れる心地いい場所でもある。
「あれ、ヒッキー!……とヤスミ先輩こんにちは」
「よお」
「結衣ちゃんどうしたのこんなところに」▪
こんなところって、俺のベストプレイスなんですけど。
「なんで……二人はこんなところで……何してるの？」
この言い回しは同級生である俺に聞いてるんだよな。藤村さんが答えるととんでもないことに……
「今朝、八幡の家に朝寄ったときに、お昼に逢いましょうって約束していたし、天気のいい日はたいがいここに二人でいるのよ」
朝チュンで学校デートの約束したみたいに聞こえるだろ、由比ヶ浜はどうでもいい事はよう話すから、葉山たちとかに聞かれてもいいのかよ。▪
「へ、へえぇ、な、なんで一緒に朝からいるの？」
「妹とこの人が仲良しなんだよ。今日も朝から一緒に『ヘボンティーン』とかみて、今年の夏コーデの話してたしな」
「そうそう、ＪＫ最後の夏だからね。派手に行くわよ、あんたも楽しみにしていなさいね」
「はあ、できるだけお付き合いします。小町の件もよろしくお願いしますね」
「まかせておきなさい。既に種が芽吹き始めているわ」
そう、お馬鹿な妹の家庭教師をお願いすべく、接触頻度を上げてもらっているわけ。小町は基本要領のいいタイプだから、スイッチ入る

の待ちなんだよ。由比ヶ浜は目を白黒まではいかないが、この美人と陰キャボッチの俺が仲よさげに会話しているのが珍しいのか、ここに居座る気らしい。
「てか、お前こそ何でここにいるんだよ」
「えーと、ジャン負けして罰ゲーム？」
「俺に……俺に話しかけるのがかよ」
「ち、違う……『なわけないでしょ、中学時代じゃあるまいし、あんた自意識過剰なんじゃないの』……ですよね」
「はあ、冗談のつもりなんですけど」
「笑えないわね。あんたの価値を認めている、あたしや小町ちゃんに失礼だからそういうつまらない冗談はやめなさい」
「は、すいません」
俺の脳内で再生される自虐的コメントを口にするとだ、この人は必ずたしなめる。そりゃ、うれしくないわけじゃないけど、それが俺だから仕方がないんだよ。どうやら部室で雪ノ下と弁当を食べていて飲み物をじゃんけんで負けた方が買ってくるって賭けをしたらしい。
「最初は渋ってたんだけどね……」
自分の糧ぐらい自分で手に入れてって……親の金だろその金は。でも、まあ、雪ノ下が普通のＪＫみたいな会話ができるようになったのは由比ヶ浜のおかげなんだろうな。ナイフみたいに尖った女で辟易していたのだが、由比ヶ浜と仲良くしてくれて多少ともこちらへの風当たりが弱くなるならばありがたい。
――――　防『雪』林　由比ヶ浜結衣‼　ありがたい。
それからしばらく、由比ヶ浜は雪ノ下が挑発に乗った話とか、じゃんけんに勝って小さくガッツポーズをして可愛いとか話をし始めた。由比ヶ浜は、少しメイクもナチュラルになり、教室での表情と少し違う雰囲気になってきた気がする。
とは言うものの、あの日のことはこいつの中でどう消化されたのかはわからない。少なくとも、三浦に追従するだけの存在をやめたってところまでは確実なのかなとは思う。
それが、雪ノ下や三浦の気持ちまで考えられるようになればいいけ

どな。
「内輪受けね。俺には関係ないけどな」
「そうかな？　ヒッキーもゆきのんとかヤスミ先輩とは二人だけで通じる話とか良くしているじゃん」
　まあ、この人とは1年近い付き合いだし、妹も知り合いだし近所だしな。▪家族の次に親しいからな。
「部活でしゃべっている時楽しそうだし、あ、あたしが入れないなーって思うこと多いし」
　絶対観察してるよなこの人。由比ヶ浜のアプローチと、俺の反応を。
「あたしももっと話がしたいなーって。それは、ゆきのんと4人でだよ。へ、変な勘違いしないでよね‼」
「ふふ、それはないわ結衣ちゃん。八幡はそういうのは卒業して……いいえ、気にしないようにしているから。ねえ八幡」
「そうですね。由比ヶ浜相手に勘違いすることはないですし、勿論あなたに対しても同じです」▪
「そう、いつまでそんなこと言っていられるのか楽しみね」
　なに言っちゃってるのこの人。なんでこっちにすり寄ってくるのかな。▪
「でも、雪乃と八幡はいいコンビだと思うわ」
「……あまりうれしくないのですけど」
「雪乃に面と向かっていろいろ言えるのはあんたくらいでしょ。それに、言いかえされても何とかしのいでるじゃない。あの子の言葉の回転について行けるのは2年じゃあんたくらいでしょうね」
　そうだな。まあ、刺激を受ける部分はある。何か由比ヶ浜が言いたそうだがそれは気が付かないふりをしておこう。

第０．４話　テニスの王子？

「入学式の日のこと覚えてる？」
入院した日のことだろ。なんとなくだな。犬をかばって大怪我して痛かっただけだな。それがどうした由比ヶ浜。
「その、飼い主のこと覚えてる？」
「ああ、妹が今日たまたまその話していてだな、お礼に来てくれたらしいんだけど、今日初めて聞いた。同じ学校の奴らしいんだけど、そのうち直接お礼に来るって話をしたらしいが、1年たっても音沙汰ないから忘れてるのかもな」
「へ、へえぇ。ヒッキーどう思う」
「どうも思わん。助けたのは俺の勝手だし、車の運転手さんには悪いことしたなと思うし、まあ、入学式楽しみで柄にもなく早起きした俺が悪いな」
それで、ケガから復帰して藤村さんに尋問されて……もう一年か。早いな。
「あんたと知り合ってもう1年ね。早いわ」
「ええ。こうして話ができるのもあの事故のおかげですから、俺の中では悪い取引ではありませんでした。本当ですよ」
そう、この人がいるだけで、登校する気が全然違う。中学までは一刻でも早く家に帰りたくって、長い長い時間クラスで気配を消していた時期がずっとあったからな。それを考えたら、昼休み、いまは放課後や週末だってこの人に会えるんだから、大きく得している気がするんだ。
「へ？　なんでそうなったの？」
由比ヶ浜に掻い摘んで去年の出来事を説明する。事故にあった話を聞きに来るようになって、クラスで話しかけられるの恥ずかしくってこの場所に逃げてきた話だ。▪
「……だから昼休みいつもいなかったんだ」▪
「どうした？」
「ううん、そんな長い付き合いなんだって思ってさ」▪

そうそう、意外と俺たち長い付き合い。サッカー部の後輩と大して変わらないし、多分、個人としては最多の時間だとおもう。
「でも、あなた友達沢山いるのに俺なんかと時間つぶしをしている場合じゃないでしょ」
「ああ、もう同学年のやつとか1年で面白そうなのはあらかた終わってるの。あんたが一番面白いのよ。小町ちゃん込みでね」
「えーと、ヒッキーの妹さん？」
「そう、世界一『間違いなくかわいいわね』……だそうです」
たまに藤村さんと一緒に小町が出かけると、姉妹って思われるくらいだから意外と似てるし、同じ系統の可愛さなんだろうな。
すると、テニスコートから先ほどの女テニの子がタオルで汗を拭きながらこちらに歩いてくる。どうやら、由比ヶ浜は知り合いらしく「さいちゃーん」と呼びかけている。
「よっす、練習？」
いや、さっきからずっとしてたし、毎日見かけるぞ。毎日いるから知ってるけど。
「あ、ヤスミ先輩チワス」
「彩加、練習終ったのね。また、時間がある時にでも相手になるわ」
「あ、ありがとうございます。うちのテニス部弱いんで、お昼も練習できるようにお願いしてやっとできるようになったんです」
「そう、努力に勝る才能なしよ。あなたもっとうまくなれるわ」
「はい、ありがとうございます」
この可愛いベリーショートの子はヤスミさんの運動部後輩軍団の一員らしい。
「ところで、由比ヶ浜さんと……比企谷君とヤスミ先輩はよく一緒にここでお昼してるよね」
なんで？　まあ、この人の知り合いなら名前ぐらい聞かれたのかもな。
「２Ｆの比企谷八幡です。よろしく」
「……ぼ、僕も２Ｆです……」
やべえ、地雷踏んだ。おまけにぼくっこかよ、くぅー。

「ヒッキー彩ちゃん男の子だよ」
「……八幡、あんた彩加と去年も同じクラスなのよ。信じられないわね」
さらに地雷踏んでる俺。まじい。ＭＡＸコーヒーおごるから許せ。
「僕、戸塚彩加です。比企谷八幡君、改めてよろしくお願いします」
上目遣いに顔を上気させるこの姿のどこが男子なんだよ。間違いなく、この周りにいる女子２人より女子力高いだろ。藤村さんは家庭的なこと全般かなり優秀だけどね。
戸塚は俺の体育の授業でのテニスのフォームが綺麗だとほめてくれる。うん、なんていいやつなんだ。この学校で俺を褒めてくれる２人目発見。女子ではないので安心して褒められておこう。小町のおかげで不安だからな。
「俺のこと知ってるの？」
「うん、比企谷君目立つじゃない」
えーと、この横にいる残念美人の変人が絡んでくるから目立つだけです。これ単体では非常に目立たないはずです。
「えーと、ヒッキー地味だよね」
「そうね、単体では地味なのだけど、一人で平然としているところが……目立つのよ。群れて騒ぐしかない男どもとは偉い違いだわ」
それ、美化しすぎですから我が主。俺がコミュ障の自意識過剰な痛い男で、教室では話しかけられないようにしているだけだからね。とは言うものの、戸塚は我が意を得たりとばかりに、なお一層キラキラとした笑顔を俺に向けてくる。うん、こんな純粋な笑顔を向けられて心が動かない男はいないだろう。告白して潔くフラれようかと思うくらいだ。
「それよりさ、由比ヶ浜。お前の罰ゲームどうなってんだよ」
「え……あああぁぁぁ‼」
まあ、そのあと戻った教室で何故か三浦が涙目だったりしたのは内緒だ。絶対、雪ノ下の突くらっただろ。

次の体育の時間、俺はペアが休みだという戸塚に誘われ、ずい分久しぶりに材木座以外の相手と体育をした。そして、インターバルの時間、戸塚から「テニス部に入ってもらえないか」と相談を受ける。

もうすぐ3年生が引退し、人数も少ないので1年生から始めたメンバーでも自然レギュラーになるようなレベルらしい。いやいや、俺なんて壁当てしかできないじゃん。そんなの絶対無理だし。

「すまん。奉仕部というのに強制的に入れられていてな、由比ヶ浜とか2Jの雪ノ下とかがいるボランティア系の部活なんだ。生徒指導の一環だからたぶん無理だわ」

ということで断らざるを得なかった。ただ、藤村さんが練習付き合うときに手伝うくらいはすると約束した。えーだって、テニス部入ったら、あの人に・激怒されるにきまってるじゃん。

流石にサッカー部引退させられたのに、テニスで復帰はできないからな。あの人の観察対象としてそれはできない相談だ。

そしてその日の放課後、俺は部室で戸塚から受けたテニス部を強くする方法に関して話を始めた。

「八幡が多少素養があったとしても、スポーツは経験がものをいう部分が大きいのよね。体の使い方をマスターする間にあんた卒業よ」

「ですよねー」

なら、経験者とか募る方がいいのか。それとも……何かいい考えはないか。

雪ノ下は、俺がテニス部に入るという前提で（追い出したいのかそもそも）集団の敵として団結させる効果はあるだろうが、チームを強化することはできないという話をし始める。俺は奉仕部辞めていいのか？

どうやら、雪ノ下は海外留学して帰国子女認定されているらしく、中学の最後の方に日本の中学に編入して、ここのJ組に所属しているらしい。何で帰ってきたんだよお前。

「……そのクラスの女子、いえ学校の女子はわたしを排除しようと躍

起になったわ。誰一人としてわたしに負けないように自分を高めようと思うものはいなかったわ……あの低脳ども……」
　藤村ヤスミの笑顔が大きくなる。雪ノ下と接触して初めてわかる彼女の思想。たいがい、転校生なんてのは値踏みされるものだ。雪ノ下はおそらく、実家の傍の公立にでも編入されたのだろう。そこには、小学校時代の同級生もいて「海外留学」から帰国した彼女を寄ってたかって弄ろうとしたわけだ。
　ところが、小学生の時以上に彼我の差を感じた彼女が相手に対して相当突き放した態度に出たのであろう、容姿も能力も衆に秀でた雪ノ下にさぞ鼻じらんだことだろう。
　雪ノ下の選民的な発想に俺は辟易する。リア充とは異なる優しくない考え。ボッチとしてはかなり先鋭的な存在だな。この考えが、家庭環境によるものか、本人の生まれ持った性質によるものなのかは、今後の経過観察が必要だ。もし、家庭環境によるものだとしたら、さぞ生きづらいだろうとは思う。
「雪ノ下みたいに可愛い顔の子が来たら、そうなるんじゃないか」
「ふふ、まあ、女の子は嫉妬深いから仕方ないわ。雪乃くらい可愛ければ▪休み時間に教室の外に人垣ができるくらいだったでしょうしね。そういうのも面白くないんでしょ、その子たちはね」
　と、俺と藤村さんが持ち上げておく。え、そういうコンビネーションも磨いてるんだよ、俺たちは。
「え、ええ、まあそうでしょうね。彼女たちと比較してわたしの顔立ちはやはりずばぬけていたといっていいし……」
　雪ノ下雪乃の容姿に文句を言うつもりはない。確かに美人さんだ。でもな、それだけなんだ。俺が常日頃目にしている二人の美人、まあ小町は美人とは少々違うけどさ、藤村さんは相当美人なわけだよ。
　感情のこもり方がね、違うのさ。他人に対する悪意を口にする雪ノ下を俺は正直美しいとは思えないんだ。先日の三浦に対する物言いもな。多分、中学の時もそうだったんだろうな。正しければ何を言ってもいいという▪ことではないだろ。そんなの、小学校低学年で学ぶことだ。▪

雪ノ下雪乃を雪ノ下雪乃たらしめる物言いは、彼女の人生を息苦しいものにしているのではないのかと思う。すきにしてくれ。
「戸塚のために何かテニス部でできることはないものでしょうか」
「そうね、テニス部の3年とは色々話したけど、彩加ほど切実ではないのよ」
そう、3年が引退するとって話だから、残されるものとはテンションが違う。戸塚だけが考えても、1．2年生の総意がなければ空回りってこともあり得る。まして、戸塚は見た目女テニだし、どこまで部に対して求心力があるのか未知数だしな。
「比企谷君は、相談されて嬉しいのかしら」
「まあな。人生初体験かもしれんな」
「そう、わたしはよく恋愛相談されたわ。あれって、相談に見せかけた牽制行為なのよね」
あれれ、さっきのお前の話は営業トークだから、そのまま話し続けんな。とはいうものの、主の意向を鑑みて話に相槌を打たねばなるまい。
「どう言う意味だ」
「自分の好きな人を言えば、周囲は気を使う。領有権の主張みたいなものなの。聞いた上で自分も好きだと主張すれば戦争行為、その男子から告白されても同じ扱いなのよ。なんでわたしが……」
はいはい、凄いですね、オモテになられるんですねって感じだな。
「そうなのね。あたしもそういうことあるけど、普通にフルから問題ないわね」
「あなたの50人切りは母校では有名でしたからね」
「そうなのね。世の中色んな男がいるのかと思って一通り告白されたら付き合うことにしたのよ。勿論、他に交際中の奴がいない時だけね。でも、同じような男ばっかでさ、だんだん嫌になってきたの。で、高校では全部・一律お断り。自分が気になる男だけにしかアプローチしないことにしたの。
それでも、1年の時はうんざりするくらい告白されて嫌になったわ」

「そりゃ、告白したら断られないって思われていますから、あなたなら当然でしょう」
「……そう。その、ありがとうね」
「何のことやらわかりませんが、どういたしまして」▪
　完全に雪ノ下は蚊帳の外であるが、我が主の言わんとすることは理解できる。雪ノ下はそもそも男に対して自分より上か下かでしか見ていないし、当然、下だと考えているんだろ。
　藤村さんは、ともに存在するに足りる男を求めていただけの話で、それに値する男は自分で探さないとだめだと気が付いたって話だ。恋愛自慢のようで全然違うだろ。
　話はテニス部の強化に戻す。
「雪ノ下ならどうする？」
「全員死ぬまで素振り、死ぬまでランニング」
「ふふ、死ぬまで素振りしたら、ランニングはできないわよ雪乃」
　そういう、頓智話じゃないのでございますよ。
「やっはろー！今日は依頼人をつれてきてあげたよ！」
　はあ、噂の主登場。由比ヶ浜の後ろには、おずおずといった感じの戸塚の姿があった。そうか、奉仕部の存在を知ったか。
「あ、比企谷君に、ヤスミ先輩……どうして」
「奉仕部の部員なの、あたしと八幡はね」
　その薄い血色の顔にパッと血の気が戻り、笑顔が輝く。うん、なんで男なんだよ。あほっぽい笑顔から一転し、無駄に大きな胸をそらす由比ヶ浜。まあ、脂肪の塊です事。立派なフタコブラクダだ。ちなみに、ヤスミさんは推定Ｄだ。由比ヶ浜はＦ＋ではないだろうか。いやいや、合格判定じゃねえぞ。ヤスミさんはＡ判定だ、雪ノ下の胸のサイズと同じなたぶん。
「やーほら、あたしも奉仕部の部員……『じゃないわよね雪乃』……」
「ええ、入部届も未提出ですし、平塚先生の承認もありませんので、現状▪仮入部です」
「……俺そんなの書いてないぞ」
「あなたは自主的な入部ではないので不要なのよ。生活指導の範疇だ

から」
　え、そうなんだやっぱり。だから、欠席できないのか俺。由比ヶ浜はルーズリーフに手書きで「にゅうぶとどけ」と書いて何やら作業を始めてしまったので、戸塚の対応は俺が変わる。由比ヶ浜、「かたたたきけん」▪じゃあねえんだから、スマホで変換して漢字くらい調べろ。▪
「戸塚彩加君……だったかしら？　何の御用かしら」
「テニス、強くして……くれるんだよね？」▪
　やべえ、雪ノ下への問いかけとしては最悪だ。
「どんな説明を聞いたのかは知らないのだけれど、奉仕部は何でも屋ではないの」
「へえ、何でも屋ではなかったのね八幡」▪
「……基準がわからないんですけどね」
　我が主は意地悪そうに俺の方を見てほほ笑む。まじ、雪ノ下の独断と偏見だから理解できねえ。
「あなたの手伝いをして自立を則すだけ。強くなるかならないかはあなた次第」
「そ、そうなんだ……」
　戸塚の希望を打ち砕く一言。まあ、簡単に砕ける希望なら望み薄だろ。由比ヶ浜が何とかしてくれるでしょ見たいなことを言う。こいつが一番俺たちを便利屋と考えている、ＴＨＥ部外者だ‼　ガッペムカつく。
「ふうん……あなたも言うようになったわね由比ヶ浜さん。わたしを試すようなことを……」
　負けず嫌いスイッチが簡単に入るよなこいつ。ある意味、近くで観察しているとわかりやすい。そして、基本的にまともなコミュニケーションがないから、こいつの性癖と言うか思考をトレースして誘導するのはおそらく簡単なんだ。
　由比ヶ浜の空気読みというか、『寄生』スキルがいかんなく発揮されている……藤村さんはこの辺に由比ヶ浜の存在価値を見出して流しているんだろうな。

三浦と異なり、自分の感情を他人に押し付けない分、居心地がよく
コントロールしやすい雪ノ下は……使い勝手がいいんだよ。

第０．５話　ＴＨＥ練習

どんな挑戦でも真っ向から叩き潰す雪ノ下雪乃、無い挑戦でも叩き潰す。そして、ノーモワ広島的平和主義者の俺でさえ叩き潰しに来るのだが、我が主のパーフェクトビジョンの前には歯が立たないのだ。ふむ、流石我が主。俺は庇護されているんだよ。

「いいでしょう、戸塚君、あなたの依頼受けるわ。あなたのテニス技術の向上を手助けする……でいいのかしら」

「うん、ぼくがうまくなれば、みんな一緒に頑張ってくれると思うから」

うん？　今の話の前半と後半がつながらなくないか。戸塚の上達が何故、他の人間のモチベーションにつながるんだ？

「八幡、答えは常に一人ひとりの心の中にあるの。だから、あんたの物差しで最初から図る必要はないわ。あんたが彩加を知ることで、次につながるの。だから、黙って協力しなさい」

承知いたしました我が主。

やる気スイッチの入った雪ノ下の邪悪なオーラに怯えるとつ可愛い。「心臓の肉1ポンドだよ」とでも言いだしそうな女だ。シェークスピアの話って当時の差別意識みたいなのが描かれていて、ちょっとどうなのッてセリフ回し多いよな。

「手伝うのはいいが、具体的にどうするんだ」

「先ほどの内容よ」

マジでやるんですか、死ぬまでって。

「比企谷君、ぼく死んじゃうのかな」

「戸塚、死ぬときは一緒だ‼」

「あんた、本気で行ってるんでしょうね八幡」

「……嘘です、言ってみたかっただけです」▪

「彩加の能力査定からでしょうね。基本的な体力の底上げと、その上での基本的な技術の精度改善につながる部分の鍛錬ね。どの道、本格的に改善するならレッスンプロなりコーチに診てもらって練習メ

ニューを考えてもらいなさい。その準備段階の手伝いってことでいいわよね」
「は、はい。ヤスミ先輩ありがとうございます」
アスリートとしては総武でも有名なこの人の言葉には、戸塚も納得したようである。まあ、奉仕部は奉仕部だからな。
雪ノ下は咳払いをすると、改めて話始める。
「放課後は部活動の練習があるでしょうから、昼休み、特訓しましょう。コート集合でいいかしら」
「は、はい。よろしくお願いします」
こうして、俺のベストプレイスから眺める場所で、しばらく昼を過ごすことになったわけだ。▪
「八幡、あんたもたまには体を鍛えなさい。背筋弱いから猫背なのよ。猫背改善の特訓も兼ねれば一石二鳥ね。小町ちゃんにも協力してもらいましょう」
俺の腐った目と双璧のアイデンティティー喪失の危機。とはいうものの、この半年くらいで死んだ魚の目とかも改善されちゃってさ、雰囲気イケメンなんだ俺。これで猫背まで改善されたら、パーフェクトイケメンになっちゃうだろ。嘘です、ごめんなさい。ボッチな時点で外見関係ありませんです。

俺は翌日の昼休み、ジャージに着替えるとテニスコートに向かって移動している。どうやら、雪ノ下たちは部室で着替えるらしく、俺は単独行動のはずであった。
「八幡‼　テニスコートに行くわよ‼」
3年生のジャージ姿で登場する我が主。小説では2年はブルーなのだが、アニメでは3年ブルー　2年グリーン　1年えんじ色という設定なので、悩むのだ。まあ、我が主はブルーが似あうのでブルーだ。
この人は何を着ても似合うのだが、芋ジャージ着ても可愛いから得だ。並んで、というか大和撫子よろしく主の半歩後ろを歩く俺、まじ侍。

「あたしも基礎トレーニング付き合うから、あんたもやりなさい」
「……理由を聞いてもいいでしょうか」
「あんたと、トレーニングしてみたかったのよ。会話で頭の中身は想像できるけれど、体を使うことは今までなかったじゃない。その為に手合わせよ」
　なるほど、この人の主目的はそこにあるわけな。まあ、相互理解が進むならそれもありだろうな。
　我が主は並の高校生男子を上回る身体能力を有し、反射速度や姿勢制御・能力は圧倒するので、葉山クラスでも苦戦するのだから、並みに毛が生えた程度の俺では手も足も出ないのだけどな。
「着替え早いですね」
「体育の授業からそのまま着替えないでいたからね」・
「何も言われませんでしたか？」
「なんで何か言われるの？　学校指定のジャージだから問題ないでしょ」
　ああ、たしかに。この人なら、ブルマでも「この後掃除当番だから」とかいってそのままの格好で部活まで現れそうで怖い。ちなみに総武はブルマではない。
　テニスコートに到着すると、すでに戸塚と雪ノ下と由比ヶ浜が其処にはいた。雪ノ下のみ制服……やる気あんのかよ。
「では始めましょう」
　雪ノ下は戸塚に足らない筋力アップのために、腕立て伏せを行うことを提案する。というか、命ずる。
「八幡も死ぬ直前まで腕立てやるわよ」
「……あなたはどのくらいできるんですか」・
「そうね、２００回くらい連続でかしら。あまり早くしても負荷がかからないから1秒間に1回くらいのストロークでね」
「えーと、３分間等速で連続するってことですよね」
「そうね、３分半くらいかしら」
　おい、１０回くらいでプルプルするだろ。多分俺は１００回ぐらいで腕が吊る。

「正面向いて顔をお互い合わせてするわよ。ペースが揃うでしょ？」
えーとこの美人さんの顔を見ながらするのは……ドキドキするんだけど。
「いい、掛け声はあたしがかけてあげる。いち……にい……さん……」
俺の目の前で大きな眼と少し低めではあるが形の整った鼻の顔が上下する。ペースを合わせ、息が漏れる。うう、きついんですけど。でも、この人の顔を合法的にまじかでみられるチャンスを棒に振るほど俺は愚か者ではない。
ということで、俺は15分くらい腕立て伏せをしていたようで、腕の感覚が無くなるまでうっかり無心で腕立て伏せをしてしまった。
▪ちなみに、その日は腕の力が抜けてしまったのでチャリは置いて藤村さんと一緒に帰ったよ。夜中から筋肉痛に襲われたことは言うまでもない。

「お兄ちゃん、ヤスミさん来てるよ。早く起きて。小町も今日は早く出ないといけないからさ」▪
疲れきって泥のように眠っていた俺の耳に、小町の声が割れ鐘のように響く。運動したおかげか、あの人の顔をまじかでじっくりしたおかげか、久しぶりに熟睡できた気がする。
「八幡、腕の調子はどうかしら」
「まあ、控えめに言って筋肉痛です」
「あのトレーニングはないわね。少しずつローテーションで負荷をかけないと、一気に同じところに負荷をかけると、筋繊維が痛むからよくないわね。むしろ、あの子はストレッチとか関節の可動範囲を拡大する方向で先に体を作った方がいいのではないかしら」
戸塚は筋肉が付いていない以前に、体ができていないようなのだ。中学まではスポーツらしいスポーツの経験もないようだという。
「でないと、テニスのような激しいスポーツでは故障の原因になるでしょう。それに、基礎体力作りはテニスコートでする必要はないもの。別メニューでするべきでしょうね」

「……なんで雪ノ下に言わないんですか」
「彼女は部長。彼女の考えは部の考えでしょ。だからよ」
なるほどね。でも、運動選手としてはダメ出ししたわけだ。戸塚とその辺は部活の時間に顔を出して藤村さんが話をするそうだ。その方が、雪ノ下のメンツも立つし戸塚も部員を巻き込みやすいだろうな。
そして、俺と藤村さんは同じ電車に乗り、同じバスに乗って総武高校に向かうわけだ。
「帰りはそうでもないですけど、朝はやたら挨拶されますねあなた」
「そうね。部活関係で知り合い多いからかしらね」
サッカー部、野球部、バスケ部に陸上部、軽音楽部や生徒会執行部にも友達多数。運動部は特に、1年生2年生の後輩から挨拶をされる。そして、男子からは睨まれ、女子からはチラ見される。
「ヤスミ先輩おはようございます!!」
ショートカットのスラっとした女子数名。バスケか陸上系かな。
「おはよう」
「あの、こちらの方は……」
「ああ、いま同じ部活の後輩。八幡ヨ」
「……おはようございます」
「おはようございます……」 てな感じで、チラチラみらてるんだよ。
俺の存在を無視して、最近の試合結果とか、練習方法の相談とか、また相手してくださいみたいな会話に続いていくわけなんだこの先。どうやら、戸塚が相談しているようなことの多くを『サッカー部のマネージャー』としてサッカー部中心に練習計画を立てていたらしく、トレーニングメニューなんかは相当手を加えたらしい。ポジション別・個人別の強化メニューとかね。
それで、下級生中心に他の部活の後輩からも相談を受けて、その関係で・運動部関係の知り合いがとても多いんだそうだ。みんな、藤村さんに助けられた存在で、いうなれば一人アスリート奉仕部なわけだ。だから、並みの人間なら雪ノ下の奉仕部なんてちゃんちゃらおかしいんだろうけど、この人はそんな素振りはちっとも見せないんだよ

な。すげえ人だよ。
「なんでそんなに熱心なんですか」
「あたりまえじゃない、みんな真剣に悩んでいるのよ。そりゃ、公立の進学校で特待生でも何でもない一趣味のアスリートだけどさ、上手くなりたい勝ちたいって気持ちに差はないわけでしょ。その気持ちに答えていくのが、先を歩くものの務めよ。あたしだって、そうやって育ててもらったんだから、下に伝えていくのよ」
なるほどね。この人に人が集まる理由がよく理解できる。誰もが、何かを成し遂げたいと思っているわけで、その気持ちが無駄にならない信頼感をこの人は他人に容易に与えることができる存在なんだな。
それ考えると、この人に告白して彼女にしようなんて考えている奴は、この人が日ごろ見せない姿のどの程度を理解していたのだろう。『最低限の努力をしない人間には才能がある人をうらやむ資格はないわ。成功できない人間は成功者が積み上げた努力を想像できないから成功しないのよ』・
雪ノ下雪乃はそう言った。それはごもっともなのだが、この人の行動を並みの人間が想像するのは無理だ。所詮、自分の器でしか人は他人を計ることはできない。１Ｌの容器に１０Ｌは入らないのだ。
だから、俺はこの人の横にいてあまりの隔絶した器に絶望的な気分になるんだよ。何一つ敵わねえってな。
「じゃあ、また昼休みね‼」
バスを降り、藤村さんは同級生と3年生用の入口に向かって去っていく。はあ、急に昔に戻ったような穏やかなようで少し寂しい気持ちになる。

あっという間の昼休み。今日も今日とて我が主はジャージ姿で教室に現れる。
「八幡、彩加　練習行くわよ‼」
藤村さんはわざわざ地上階の自分の教室から3階までやってくるのだ。その無駄な元気はどこから湧いてくるのだろうか。

「今日も体育のまんまですか」
「違うわ、あんたと別れた後、部室でジャージに着替えておいたの。今日は体育ないからね」
「……先生は『何も話しかけてこないわよ。藪蛇になるから』……ですよね」▪
この文武両道の才女は、教科書も開かず授業も聞いていないのにほぼ確実に設問に正解するんだよ。おかしいだろ。新入生のころは色々言われていたようだが、様々な経験を経てアンタッチャブル認定されたらしい。少なくともこの人は同級生を使嗾して授業の妨害をしたり、徒党を組んでリア充よろしくバカ騒ぎをするような誰かの姉のようなことはしないからだ。
「わたし、棲み分けって大事だと思うのよね。先生は先生の領分が、あたしにはあたしの領分があってさ、何から何までしたがうのは違うとおもうわけ。学校指定の服を着ているのだから、それに関して五月蠅く言われる筋合いわはいわよね」
そういや、戸塚はいつもジャージだな。▪
「なんで戸塚は制服着ないんだ」
「……ぼく、似合わないんだ制服」
え、リボンとか超似あうぞお前。あと、チェックのスカートも可愛いと思う。いやいや、あの白い縁取りのブレザーにループタイは校則違反だ。葉山は爺ちゃんの形見なんだろうか、見たことないぞあんなの。

昼練のメニューはテニスコートでできる練習に変更され、基礎的な練習は朝や練習日以外で実施することになったんだよ。壁打ちをしながら、スイングの確認。ある程度体がほぐれたら、コートに出てレシーブの練習をする。
スプリットステップという動作が大事で、フットワークにおいて非常に大事な要素なんだと。テニスはボールに追いつくこと、ボールを打つためには素早く反応する▪必要がある。その最も重要な基本動

作が「スプリットステップ」。
小さくジャンプし、両足脚に均等に体重をかける。きちんと行なう習慣がついているかどうかで、ボールに対する反応が大きく変わってくるという。どの位置にボールが来ても、1歩目を早くする効果があるってことなのかもね。
「だから、その習慣を体にしみこませるためには……あの球出しではだめなのよ」
大昔のバレーボールのレシーブ練習のように、はたまた１０００本ノックよろしく次々に拾えない位置ギリギリに由比ヶ浜にボールを投げさせる雪ノ下。
「スプリットステップの意味は、相手がどこに打とうとしているのか、集中して「観る」こと、また同時に身体的に前後左右どの方向にも動けるニュートラルな状態を作るということが目的なの」
なるほどね。この人はきちんと学習した上で提案しているわけだ。雪ノ下はどうなんだろう。テニスの経験はあるのかな。俺は藤村さんと隣のコートで練習相手になる練習をしている。どうやら男子のテニス部は稼働戸塚だけの日もあるらしく、練習相手にも事欠くため、俺を急遽練習相手として育成することにしたようだ。
藤村さんとテニスするのもいいかもしれないと思っていたこの時の俺を、全力で殴ってやりたい。
戸塚が派手に転ぶ。まあ、そうなるよな。
「さ、さいちゃん大丈夫」
「だ、大丈夫だから続けて」
「いったんクールダウンしましょう。雪乃は、保健室から救急箱借りてきなさい」
「……はい承知しました」
流石に反省したのか、雪ノ下は大人しく救急箱を取りに立ち去った。藤村さんは「体冷えると嫌だから、ちょっと走ってくるわ」と元気に走り出していった。まあ、ほんの2か月前まではサッカー部でほぼレギュラー並みに体動かしてたんだからな。楽しくなるんだろう。
「あー　テニスやってんじゃん。戸塚、あーしらもテニスして良い？」

そこにはＨＧがやってきていたのでした。■

第０．６話　ＴＨＥ試合

「あ……ユイたちだったんだ……」▪
小柄な赤メガネの女子がつぶやく。風雲急を告げるテニスコート。
不味くない？▪三浦は戸塚に話しかける。
「戸塚、あーしらもここで遊んでいい？」▪
「えーと、ぼくたちれんしゅうしているんだけど……」
「はあぁ、なに、聞こえないんですけど？」
戸塚は繰り返し、練習だからというのだが、由比ヶ浜がいる時点で部外者だし、男子テニス部だけで使用しているんじゃないんだから使わせろって話になる。
「三浦すまん、ここは戸塚が頑張って昼休み練習の使用許可とっていてな。万が一、部外者も使用しているなんてことになると、許可取り消しになるかもしれないんだ。男子テニス部も廃部の危機でな、戸塚一人でも戦績上げないと、ヤバいってとこで俺たち協力しているだ」
ちょっとしんとなるＨＧ。嘘じゃないけど、可能性の話だからね。
「それなら、あーしも練習協力するし。経験者だからさ」
三浦経験者なんだ。由比ヶ浜もいるし、三浦の『正しい資質』発動しちゃったかもしれない。やっぱいいやつなんだな。
「けんか腰は良くないよ。それならさ、皆なでやった方が楽しいよね」
えーと、葉山隼人君。もうすぐあの人がランニングから帰ってきますよ。君のその持っていない『資質』何とかした方がいいね。三浦は戸塚がテニス部廃部の危機に立ち上がったこと、そして、昼休みこのところ由比ヶ浜が一緒にご飯を食べられない理由を知ってテニス経験者として協力するって申し出をしてくれたわけだ。
葉山の提案は、「俺たちも遊びに混ぜろ」だろ。その理屈で言うとだ、俺たちもサッカー部の練習思い付きで混ぜろよな。
「葉山、みんなって誰のことなんだよ」
「それは……ここにいるみんなだよ」
「三浦は経験者で協力してくれるって話だろ。お前たちは何なんだよ。それにだ、俺と由比ヶ浜がいる時点で気が付けよ……だから持っ

てねえんだよお前」
葉山が動揺する。
「ねーちょっと隼人。戸塚の練習時間ドンドン無くなっているからさ、早くテニス始めようよ」
練習再開するか。雪ノ下も戻ってくるだろうしな。
「じゃあさ、部外者同士で勝負して、勝った方が今後昼休みテニスコートを使えるってことにしないか？　勿論、戸塚との練習にも付き合う。強い奴と練習した方がよくないか？」
あーあ、多分この騒ぎをコートの見える位置から確認しているよ我が主。それに、その理屈だと、サッカー部のグランド使用権、取り上げられるぞあの人に。

三浦のテニスがしたいという欲望と戸塚を助けたいという人情の秤が、葉山の一言で崩壊。何故か勝負することになる。『部外者同士』でだ。残念ながら、俺のテニスは体育の授業レベル。とても経験者である三浦に太刀打ちできない。そして、由比ヶ浜は見た目通りの能力だ。裏技とか実はすごいとか一切ない。
テニス勝負のうわさを聞き付けた連中が……コートに集まってきた。こんなお祭り行為を行う人はあの人しかいません。どんだけ招集してるんだあんた。葉山たちもビビり気味だ。引くに引けない葉山隼人だ。▪
「じゃあ、もう一度確認する。俺たち奉仕部は、男子テニス部の戸塚君から依頼を受けて、このテニスの特訓を手伝っている。このコートは彼が長い時間熱心に顧問の先生にお願いしてようやく借りることができた場所だ。
また、彼の動機は、3年生引退後、男子テニス部の大幅な戦力減から廃部の危機を感じたことにある。その為、俺たちは昼休み2週間ほど彼に付き合っている。
それを踏まえた上で、『部外者』同士で勝負をして、勝った方がテニスコートの使用権を得て戸塚の練習相手を務める……だな」

コート周辺がざわざわし始める。そりゃそうだ、葉山は自分たちが遊びたいから、正式なテニス部員である戸塚の使用権を巻き上げようとしているとしか思われないからな。
「そんなつもりじゃ……」
『隼人、じゃあどんなつもりなのか申し開きしなさい。あんたも、あたしとサッカー部のグランド使用権賭けて勝負しなさいね!!』
我が主登場。これがやりたかったのね。その為のギャラリーであり、葉山の問題点を周知させるための演出ね。部長の目潰えたかもね？
「優美子ちゃん経験者なのね。助かるわ。でも、中学から引退してもう1年はブランクあるわよね。動けるかどうか試してあげるから、着替えてらっしゃい」
「はい、あ、ありがとうございます」
「じゃあ、隼人、あんたがどの程度の実力あるのか、あたしが試してあげる。戸塚君、審判お願い。八幡、隼人の後ろで球拾いしなさい」
「……承知しました」
はい、葉山隼人君公開処刑始まるよ。

「じゃあ、あたしからのサーブでいいわよね」
ジャージに鉢巻きを締めた藤村さんがコートに立つ。由比ヶ浜がボールを渡し、サーブが始まる。
俺は葉山の後方から、あの人のサーブの姿を観察する。美しいトロフィーポジションと言われるトスの姿勢、そして、肩が滑らかに動き、全身の体重を乗せた重たいサーブが葉山のコートに突き刺さる。葉山も体育の授業では動けているものの、真面目に、サーブだけなら相当のレベルであることが見て取れるので、反応できないでいる。
「隼人、この程度のサーブが拾えないなら、彩加の相手は無理よ。でも、調子に乗ったイケメンはもう少し恥をかいてもらおうかしらね」
コートに響き渡る大きな声で、葉山を叱責する我が主。ギャラリーもこの公開処刑の成り行きを見守っている。がしかし、ここで部長様

が帰って来られたのである。▪
「何事ですか、藤村先輩」
「ああ、雪乃ちょうどいいところに戻ってきたわね。実は、優美子ちゃん、テニス経験者なんですって。で、昼休みのトレーニング付き合ってくれるっていうから、力試ししようと思ってね。
　隼人もやりたがっていたんで、いまあたしが相手をしてみたんだけど、やっぱり経験者ではない分あんまり効果ないみたい。だから、隼人はいいわ」
「……はい、お役に立てず申し訳ありません」
「いいのよ。それに、あんたのせいでグランド使えなくなったらみんな困るしね」
　あはは、と軽快に笑う藤村ヤスミ。葉山はさっきまでの明るく爽やかな嘘くさい笑顔がかき消えて、げっそりした表情である。
「翔‼　あんたが隼人とめないで誰止めんのよ‼　一緒になって調子にのってると容赦しないわよ」
「は、はい。スンマセン‼」
　戸部は９０度に頭を下げ、つられてお供も頭を下げている。運動部の連中にとっても、あの人に目をつけられるのはあまりいい事ないからな。ネットワークからハブられる可能性があるんだよ。

　金髪を後ろで束ねた三浦がコートに戻ってくる。流石に芋ジャーはなかったので女テニのユニオームを着ているらしい。
「雪乃はテニスできるのかしら」
「ええ、多少は」
「丁度いいじゃない、この前教室でいざこざあったけど、テニスで仲直りっていうのはどうかしら」
　雪ノ下の目に仄暗い光が宿る。そして、三浦はリベンジ精神を噴き出している。
「ゆみこ〜　まじ雪ノ下さんと対決とか、総武２大美女対決っしょ『あたしも入れておきなさい翔‼』もちろんです。はあ、藤村先輩まで参

加するなんて、こりゃ有料でもいけるくらいっしょ」
葉山を打擲して盛り下がっていた空気が一気に燃え上がる。流石『祭姫』である藤村ヤスミだ。
雪ノ下が着替える間に、三浦は軽く藤村さんと打ち合いをしている。うん、多分戸塚より数段上手い。経験者というよりは……かなりの戦績だったんだろうな。我が主もご満悦である。
「やっぱ、優美子ちゃんはそういう感じの子だと思っていたわ。まあ、辞めた理由は聞かないけど、でもそういう子でよかったわ」
主の中で三浦優美子の評価がさらに高まったようだ。こいつ、葉山が好きじゃなきゃ相当いい女なんだけどな。

「由比ヶ浜、どっち応援するんだ」
「……両方？」
なんだよ、そういうところだけ調子いいんだなお前。既に、この試合はテニスのコート獲得合戦から、単なる美女テニス大会へと変貌しているからな。
「八幡は、どっちが勝つと思う？」
「順当にいけば経験者の三浦でしょうけど……」
「雪乃が経験者ではないと何故わかるの？」
はい？　だって、あの滅茶苦茶なトレーニングメニューとか練習参加しないで自分だけ制服とかじゃん。なんで、経験者なら率先してテニスの練習参加しないんだあいつ。
「雪ノ下さんだっけ？　あーし手加減とかできないから。オジョウサマなんでしょ？　怪我しないうちにやめといたほうがいいんじゃないの？」
早速の前哨戦ありがとうございます。炎の女王様復活‼　泣いたカラスが……いえなんでもないですゴメンなさい。縦ロールをいじりながら、三浦が不敵な笑みを浮かべる。まじで、やる気です。
「安心しなさい。わたしは手加減してあげるから。その安いプライド、粉々にしてあげるわ」

ああ、こいつ経験者なんだ。まじで。でも、藤村さんよくわかるな。
「足運びが経験者なのよ。さっきも言ったでしょ、あの子は普通の人間が無意識にどちらかの足に体重を交互に架ける動きをしないの。古武術でもやっているのか、テニスにも応用しているのかわからないけれど、普通の動き方ではないのよ。スプリットステップ自然にできているわ。」
――――そんなの見てて分かるあんたの方が普通じゃねえだろ。
試合、サーブは三浦から。
「雪ノ下さん、知ってるかしんないけど、あーしテニス超得意だから」
左手でボールをコートに弾ませながらサーブのタイミングを計っている。
「怪我とかさせちゃったらゴメンね‼」
鋭い風切り音とボールを打つ音がコートに響く、打球は雪ノ下の左方向、利き手と逆に突き刺さる。雪ノ下は左足を踏み込み、軸足として回転するとバックハンドでレシーブが決まる。予測できていなかったのか、三浦の足元にボールが帰り、小さく三浦が悲鳴を上げる。恐らく、この1球で三浦の警戒心は数段引き上げられたであろう。
「ね、やっぱり経験者だったでしょ」
「なら、なんでテニスに参加しなかったんでしょうか」
「一つは、レベル差がありすぎて教えられなかった可能性。もう一つは、彼女の身体的な弱点の問題かしらね」
確かに、雪ノ下は教えるのはあまりうまくないのだろうことは想像できる。自分でできる奴は、得てして自分の理解の視点で教えるので、できないやつの何ができないのかが理解できない。故に、教えてもできないので嫌になってしまうというのはありがちだ。ボッチの雪ノ下はなおさらだろうな。
「あなたも知っているとは思わないのだけれど、わたしもテニスが得意なのよ」
三浦は表情を引き締める。決して追い詰められた表情ではない。雪ノ下は恐らく技術的な面では優秀なんだろう。そういう場合は、泥臭い試合をして相手を削ることになるんだろうなと俺は推測する。

藤村さんはニコニコとことの推移を見ている。
　雪ノ下優勢でゲームは続く。三浦のサーブは確実に返され、そして、その球が帰ってきた場合は、確実に相手のコートに沈める。問答無用の一方的ゲーム展開に、ＨＧも沈黙し、雪ノ下への声援が確実に増している。
　雪ノ下はコートを縦横に走り回り、まるでクラシックバレーのような優雅なポーズで三浦を翻弄する。三浦はいつもの女王様ぶりは鳴りを潜め、一方的ななぶりものにされるかのように思えた。
「雪乃の足が止まりそうね」
「……まだ、１セットってところですよね」
「それがあの子の弱点なんでしょうね」
　持久力がないってことか。確かに、あの細い脚であれだけの力と速度を出すのであればスプリンターになるしかないか。そういえば、１年冬のマラソン大会で、男子は葉山だったけど、女子は雪ノ下ではなかった……この人じゃん。
「ふふふ、雪乃がスプリンターであることは冬のマラソン大会で知っていたわ。彼女、短距離では学年トップクラスだったけど、持久走は完走できなかったの。マラソン大会も途中棄権よ」
　三浦は知らなかったけど、試合経験の差でそこに賭けたわけだ。
　２セット目、完全に足のとまった雪ノ下は肩で息をしている。先ほどまでと全く逆の展開であり、もしかすると、このセット捨てて体力を回復させているんじゃないかと思うくらい、雪ノ下は全く動かない。
　そして、セットカウント１―１で第３セットに突入。これで勝負が決まる……ハズだったんだよ。
「あれ～　みんな授業始まってるよ～。あー　ヤスミちゃんここにいたんだ」
「どうしたのめぐり。何で予鈴が鳴らないのよ」
「校舎の中だけ鳴ったみたい。でも、小さくしか音が出ないんだって。グランドのスピーカーからは音が出ないから、生徒会役員が声かけて回ってるんだよ。もう授業始まっているから解散してください」

はい‼　ということで、総武２大美女対決は決着を持ち越すことになったわけ。

奉仕部と戸塚だけ残り、由比ヶ浜と雪ノ下は着替えもあるので先に部室に引上げさせた。ネットを緩め、ボールを集め、コートを整備する。やれやれ、これであの二人の関係が悪くならなきゃいいんだけどな。

そういえば、今日の試合に何の意味があったんだろう。

「なんで雪ノ下と三浦に試合させたんですか」

「雪乃の世界を人ごと変えるに必要だからよ」

藤村さんは言う。雪ノ下は由比ヶ浜が友達となって変わり始めた。それだけでは足らないんだそうだ。▪

「０から１は大きな変化よ。でも、あの子の考えでは１にしかならないわ」

由比ヶ浜の友達である三浦を理解することこそ、由比ヶ浜を理解することにつながる。そして、三浦優美子もあいつの友達足りえると理解できる。そうして雪ノ下が人とのかかわりを広げていかないと……

「永遠に陽乃ちゃんには勝てないし、勝ちたいと考えてしまうのよ。それでは、あの姉妹はちっとも幸せになれないから……かしらね」

完璧超人であっても幸せじゃないって、どんな世界で生きてるんだろうな。

雪ノ下雪乃には、俺の知らない秘密がたくさんあって、それをずっと観察している我が主がいるわけなんだな。そして、奉仕部で俺はその観察に参加しなきゃならないわけだ。